

群 教 セ	I01 - 04
	平17.231集

# 食事にかかわる技能向上を目指した 指導の工夫

— ダウン症児Aの事例を通して —

特別研修員 佐藤 紀子 (沼田市立升形小学校)

## 《研究の概要》

本研究は、特殊学級に在籍するダウン症児Aの食事に視点を当て、学校給食の場面における直接的な指導と、自立活動の時間における間接的な指導を組み合わせることで支援することにより、食事にかかわるAの様々な技能の向上を目指した実践である。Aの実態を「チェックリスト」を用いて把握し、ダウン症の特性を考慮しつつ家庭と連携した支援を行った。Aは余裕をもって食事ができるようになり、友達とのかかわりも深まってきた。

**キーワード** 【特別支援教育 知的障害 ダウン症 食事指導 自立活動 学校給食】

## I 主題設定の理由

ダウン症であるAは小学校の特殊学級に在籍する児童である。知的な遅れがあるため、学習面においては、特殊学級でAの教育的ニーズに合わせた指導や、通常の学級でAに配慮をした指導をしている。学習面については、今後もこのようにAのニーズに合わせた柔軟な対応をしていくことが望ましいと考えている。

一方、着替えや排泄、食事などを含む日常生活面においては、できる限り級友と同じように学校生活を過ごさせたいと考え、集団生活の中で学ぶことの良さを生かしながら、必要に応じて個別の支援を行ってきた。その結果、Aにできることが徐々に増えてきたが、動作の補助や言葉かけなど部分的な支援が必要な場面がまだ見られる。

例えば、着替えについては、基本的な動作は大体自分でできるようになったが、時間の短縮、衣服の整理・整頓、身だしなみなどが課題として残っている。排泄については、たまに失敗することがあるので、その回数を減らすとともに、失敗しても自分から着替えられるようにすることなどが課題である。

食事については、偏食をせず何でも食べられるものの、上顎低形成、舌の動きがぎこちない、指先の巧緻性が低いなどといったダウン症児の特性から、時間がかかったり、食べこぼしをしたりすることがよく見られるため、言葉かけによる支援が必要なことが多い。

Aの食事は、着替えや排泄と異なり、大切なコミュニケーションの場でもある。会話力が高まり様々な面で成長したAにとって、給食を通じて友達とのコミュニケーションを深めることは大切なことである。にもかかわらず、Aは食べることで精一杯で、せっかくのチャンスを逃してしまっているのが現状である。

そこで、いくつかある課題の中から特に食事に焦点を当て、ダウン症の特性を考慮しながら指導することが必要であると考えた。食事に関するAの実態を把握し、給食の場面における直接的な指導と自立活動の時間における間接的な指導を組み合わせることで指導することによって、Aの食事にかかわる技能は向上すると思われる。そうすれば介助や支援の頻度はおのずから少なくなり、時間に追われるプレッシャーからも解放されるであろう。そのことはAの願いでもあり、Aの日常生活をより充実させるためにも必要なことだと考える。

時間的にも精神的にも余裕をもって、気持ち良く食事ができるようになることで、Aと級友とのコミュニケーションも、これまで以上に深まるのではないかと考え、本主題を設定した。

## II 研究のねらい

ダウン症児Aが抱える課題の中から食事に焦点を絞り、給食の場面と自立活動の時間において、ダウン症児の特性を考慮した指導を実践することで、Aの食事にかかわる技能の向上を目指す。

### Ⅲ 研究の見通し

- 1 食生活にかかわる内容を、項目ごとに整理して実態把握をすることによって、児童に適した指導内容がより明確になるであろう。
- 2 給食の場面における直接的な指導や、自立活動の時間における間接的な指導を組み合わせることで、指導の効果が高まるであろう。
- 3 保護者との共通理解を図り、食事の指導に関する情報や家庭で活用できる教材・教具などを提供することで、家庭と連携した指導を展開することができるであろう。

### Ⅳ 研究の内容

- 1 実態把握  
食事に関するチェックリストの記入  
給食指導日誌の記録、保護者へのアンケート
- 2 自立活動の時間における指導  
食事にかかわる技能の模擬的な練習  
食事にかかわる簡単な知識の習得
- 3 給食の場面における指導  
食事にかかわる技能の具体的な指導、実践
- 4 家庭との連携  
食事にかかわる情報交換  
授業参観、給食参観、教材の提供
- 5 指導の成果の検証  
食事に関するチェックリストの再記入  
給食指導日誌の記録分析  
保護者へのアンケート、模擬的な練習の記録

### Ⅴ 研究計画

表1 Aに対する食事指導の概要

	自立活動の時間における指導	給食の場面における指導	家庭との連携
6月	・食事にかかわる技能についての 実態把握（練習前の記録）	・チェックリストの記入① （給食の場面に関して） ・給食の場面における観察記録 （給食指導日誌として継続記録）	・チェックリストの記入① （家庭での食事に関して） ・保護者へのアンケート① ・保護者との話し合い
7月 8月	・担任、協力学級担任、介助員との三者会議 ・指導内容やねらい、方法、評価計画などの明確化		
9月 10月 11月	・模擬的な練習 ・食事のマナーや、食品に関する 簡単な知識についての指導  ・授業公開	・好ましい食べ方や動作につ いての具体的な指導 ・自立活動の時間に習得した 知識や技能の想起 ・成果の実感	・連絡帳を通じての情報交換 ・家庭で活用できる教材、教 具などの提供  ・給食の場面の参観
12月	・模擬的な練習による指導の成果 の検証（練習後の記録）	・チェックリストの記入② （給食の場面に関して） ・給食指導日誌の分析 ・担任、協力学級担任、介助員 との三者会議	・チェックリストの記入② （家庭での食事に関して） ・保護者へのアンケート② ・保護者との話し合い
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">                     ・考察（研究の成果の検証、今後の指導についての展望）                      ・研究のまとめ（研究報告書作成）                 </div>			

## VI 指導の実際

### 1 実態把握について

- (1) 食事指導に関する文献を参考に『食事に関するチェックリスト』を作成し、記入することで、食事に関する実態把握を試みた。

『食事に関するチェックリスト』は、小学校の特殊学級に入級する児童を想定し、食事にかかわる技能を、16の項目、4段階の区分に分けて作成した。(資料1)

記入は、保護者と協力学級担任にもしてもらった。

- (2) 児童の給食の場面の様子を観察し、『給食指導日誌』として記録した。(資料2)

そして、6月中の1ヵ月間の記録を分析することで、Aの給食の場面における実態把握を試みた。

- (3) 保護者に『食事に関するアンケート』を実施し、家庭におけるAの食事についての情報収集及び保護者のニーズの把握を試みた。

(資料3)

- (4) 特殊学級担任、協力学級担任、介助員の三者で、Aの食事に関する実態や課題などについて話し合った。

- (5) (1)～(4)の結果をもとに、Aの食事に関する実態を表2のようにまとめた。

表2 Aの食事に関する実態

【食事にかかわる実態のレベル】

◎満足できるレベルにあるもの

○満足できるレベルではないが、今すぐ指導しなくても良いもの

△満足できるレベルではないが、指導すればすぐに改善が見込めるもの

▲満足できるレベルではなく、今すぐ指導する必要性のあるもの

Aの食事に関する実態	
偏食嗜好	◎偏食は見られず、大概のメニューは嫌がらずに口にすることができる。 △調味料の種類や使用量などを考えて利用することは、うまくできない。
箸	○握り箸ではない持ち方で、箸を使うことができる。 ▲コーンや豆などの小さいものをはさんだり、魚の小骨を取る、肉や魚を食べやすい大きさに切り分けるなどの動作は、うまくできないことがある。 △割り箸をうまく割れないことがある。
スプーン	△食べ物をテーブルや床にこぼすことがあっても、少量である。 ▲口の周りを汚すことが多い。 ▲食べ物や汁の量が少ないとき、うまくすくえずに器に残ることが多い。
フォーク	◎フォークで食べ物を刺して食べられる。 ▲いったん刺した食べ物が落ちることがある。 △麺を巻き付けたり、フォークと共にナイフを使って食べることは難しい。
飲む	○カップやコップ、ストローを使って飲むことができる。 ○ストローを袋から出して、パックに刺すことができる。 ▲飲み物のたまっている位置を意識して、ストローの向きを変えることは苦手である。 ▲飲むのに時間がかかることが多い。
容器・袋皮・種	◎みかんやバナナの皮を手でむくことはできる。 ▲果物の種を取除くとき、果汁で手を汚したり、周囲に気兼ねせず、無造作に口から吐き出したりする。 ▲食品の袋や容器の蓋は、開けられるものもあるが、小さい物や力のいるものは、中身や汁がこぼれる。 ▲小さい種を取除いたり、夏みかんのように固い皮や内側の袋を開いたりすることは難しい。
食合わせ	○言葉をかければ、主食と副菜をバランス良く食べようと努力したり、食事中に汁物や飲み物をとったりすることができる。

以下省略

## 2 自立活動の時間における指導について

- (1) 生活のリズムや生活習慣の形成は、自立活動の内容の「1 健康の保持」に含まれるため、自立活動の時間においても、食事にかかわる間接的な指導を行った。
- (2) 週に2～3時間、自立活動の時間を設定し、他の指導内容と組み合わせながら、反復的・継続的に指導ができるようにした。
- (3) Aがゲームを好み、楽しみながら食事にかかわる技能を習得できること、練習の成果が具体的に確認できることなどから、指導内容の一部を遊びやゲームの形式にした練習を取り入れた。
- (4) ゲームは『ぱくリンピック』と名付け、児童の実態を考慮して内容を設定したり、習得状況に応じて難易度を変えたりした。

## 3 給食の場面において

- (1) 給食のメニューや食器は他の児童と同様にし、友達と一緒に食べられるよう座席を配置した。給食当番も可能な限り他の児童と同じように参加させ、特殊学級担任や介助員が支援に当たるようにした。

- (2) 過度の支援によって和やかな雰囲気を壊したり、級友がAに対する差別感をもたないよう配慮しながら指導にあたった。
- (3) 好ましい食べ方や動作を、①教師が実際にやって見せる、②自立活動の時間に習得したことを想起できるよう言葉をかける、③がんばったことが実践の場で役に立ったという喜びが味わえるよう賞賛するなどして、食事に対するAの意欲を高められるよう工夫した。

## 4 家庭との連携において

- (1) 授業や給食の様子は適宜保護者に伝えるようにし、繰り返しの練習が必要な課題については、宿題として家庭に協力を依頼した。保護者に協力を呼びかける際には、過度な負担を強いることのないよう配慮した。
- (2) 授業参観は、学校側が計画したときだけでなく、保護者の希望に応じて、いつでも気軽に参加してもらえるようにした。
- (3) 給食の様子を参観してもらう場合は、保護者にも児童と一緒に給食を食べてもらいながら、課題や支援のポイント、指導の成果などを具体的に見てもらうようにした。

表3 箸を使って、小さいものでもつまめるようにするための指導例（一部抜粋）

○印は成果 ▲印は課題（以下の表でも同様）

	自立活動の時間における指導	給食の場面における指導	家庭との連携
指導法	・直径や高さが異なる円柱型の木片セット（市販品『お箸でど～ぞ』）を活用した。箸で木片をつまみ、別皿へ全部移動する練習を取り入れた。	・時間的に余裕のある時は、スプーンやフォークに頼らず、なるべく箸を使って食べるよう指導した。 ・箸の持ち方、動かし方などを想起できるよう、実際にやって見せた。 ・マナーを守ってきれいに食べることの大切さを周囲の児童にも話した。	・授業で使用している木片セットと同じもの（市販品『お箸でど～ぞ』）を用意し、家庭でも繰り返し練習してもらった。  ・「お家でやったよ。お母さんが勝ったよ。」という発言やAの絵日記の記述から、家庭でも練習している様子が伺えた。
指導前	・6月の時点では、10分経過しても全部移動させることができなかった。	・小さいものは箸を使わずスプーンで食べたり、食器に直接口を付けてかきこむことが多かった。	
結果	○重くて大きい木片や、薄くて皿に張り付きやすい木片は、つまむのが難しかったが、11月下旬の時点で、2分程度で全部移せるようになった。	○箸の使い方を友達が教えてくれるなど友達からの働きかけも増えた。 ○箸を使ってきれいに食べることの大切さが理解でき、必要以上にスプーンを使うことがなくなった。	
考察	・箸の向きや微妙な力加減に留意しながら練習を継続することによって、さらに技能が向上すると思われる。	・友達と励まし合いながら食べる習慣がついたので、より意欲的になったと考えられる。	

表4 箸を使って、少々固い食べ物でもちぎることができるようにするための指導例（一部抜粋）

	自立活動の時間における指導	給食の場面における指導	家庭との連携
指導法	<ul style="list-style-type: none"> <li>箸で紙粘土をいくつかの小さい固まりに切って、穴に入れるゲームを取り入れた。条件によって難易度が変わるので、紙粘土は決まった種類の物を1袋分使用し、直径4cmの穴（カレースプーンが入る程度の大きさ）に入れるよう条件設定した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>箸で切れる物は、かじらないで小さくして食べる方が好ましいことを、実演して見せることで理解させた。</li> <li>Aの手を取って一緒に食べ物を切り、感覚がつかめるようにした。</li> <li>周囲の児童にも話し、友達からも刺激が受けられるようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業参観で保護者に『ぱくリンピック』の様子を見てもらい、食べ物を小さくする際の箸使いや、支援のポイントについて共通理解を図った。</li> </ul>
指導前	<ul style="list-style-type: none"> <li>箸で紙粘土をちぎることができなかったが、練習意欲はあり、「教えてください。」と言っていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食べ物を小さく切って食べようという意識は少なく、かじることが多かった。</li> <li>かみ切れない時に、食べ物が口からはみ出したままできていることがあった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来的には右手だけで食べ物が切れるようになることが望ましいが、指の力がつくまでは、このやり方で十分であることを理解してもらった。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>○箸の1本は紙粘土の中に刺し、もう1本は紙粘土の外に立て、左手を使って箸と箸をギュッと引き寄せるやり方で、何とか切れるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○むやみにかじるのは好ましくないということが理解でき、なるべく小さくちぎって食べようとするようになった。</li> <li>▲箸で切れる物と切れそうもない物の見分けがつかず、うまく切れずに時間が過ぎることがある。</li> </ul>	
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>左手に頼らず切れるようにするには、指の力や巧緻性が足りないため、それらを高める遊びや指導も必要だと思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『ぱくリンピック』で練習したことが自信につながり、食べ物を箸で小さくすることに対して意欲が高まったと思われる。</li> </ul>	

表5 箸を使って、魚の骨などをより分けることができるようにするための指導例（一部抜粋）

	自立活動の時間における指導	給食の場面における指導	家庭との連携
指導法	<ul style="list-style-type: none"> <li>紙粘土の中に隠したホチキスの針を箸で探し出して、うまくより分けるゲームを取り入れた。紙粘土は決まった種類の物を半袋分使用し、ホチキスの針は5本とした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に魚の骨をより分けて見せたり、『ぱくリンピック』を想起させたりして、箸を使って魚の身を細かくほぐすと良いことを理解できるようにした。</li> <li>骨を取る速さや、取れた骨の本数を友達と比べるなどして、楽しく食べられるよう工夫した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業参観で保護者に『ぱくリンピック』の様子を見てもらい、魚の骨をより分ける際の支援のポイントについて理解してもらった。</li> </ul>
指導前	<ul style="list-style-type: none"> <li>最初はホチキスの針が見付からなかったり、うまく取り出せなかったりした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな骨以外は、食べてみてから口から吐き出すことが多かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者から、「魚の骨を探すのも、宝探しの感覚で楽しんでますね。」という感想があった。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>○紙粘土を細かくほぐすとやりやすくなると説明したところ、集中して取り組み、徐々にホチキスの針を見付けられるようになってきた。</li> <li>▲ホチキスの針が見付けられても、思うように箸で挟めないことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○まだ時間はかかるが、自分で骨を見付けてより分けられるようになった。</li> <li>▲容易に食べられそうな小さい骨や筋でも几帳面に取ろうとするので、時間がかかることがある。</li> </ul>	
考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>指の巧緻性を高める遊びや指導を取り入れることによって、箸が自在に動かせるようになり、さらに技能が向上すると思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達がAの上達ぶりを認めてくれたことで、骨を取ることに意欲が高まったと考えられる。</li> </ul>	

表6 パック調味料の袋を開けて、かけることができるようにするための指導例（一部抜粋）

	自立活動の時間における指導	給食の場面における指導	家庭との連携
指導法	・ラミネート用フィルムに切込みを付け、マーカーで印を付けたリ、ミシン目を付けたリして、ねらい通りに指で切り取る練習を取り入れた。	・切り口を探し、端を三角に切り取る、ねらいを定めて少しずつまんべんなくかける、パックからきれいに絞り出し、周囲や指を汚さないようにトレーの隅に置くことを説明し、実演して見せた。 ・切り取る部分にマーカーで印をし、切り取る際の目安になるよう工夫した。	・授業で使用しているラミネート用フィルムと同じ物を持ち帰らせ、家庭でも繰り返し練習してもらった。 ・「失敗したけど、13本できました。」という発言やAの絵日記の記述から、家庭でも練習している様子が伺えた。
指導前	・無造作に引きちぎろうとするので、印通りに切れることは少なかった。	・無造作に袋を引きちぎるため、中身が飛び出て、指を汚すことが多かった。	
結果	○まだまだ切り方が雑になってしまうことが多いが、印を意識して切れるようになってきた。	○切り口はすぐに探せるようになった。 ▲パックの端を三角に切り取ることができずに口が大きく開いてしまったり、ギュッと指で握って調味料で指や衣服が汚れてしまったりすることがある。	
考察	・印がなくても、切り取る部分の形を意識して切れるように、今後も練習を継続していく必要があると思われる。	・いろいろな調味料に慣れ親しむことも大切であるが、調味料を使い過ぎないように気を付けさせたい。	

## Ⅶ 指導の成果の検証

### 1 『食事に関するチェックリスト』から

担任、協力学級担任、介助員、保護者のそれぞれが『食事に関するチェックリスト』に再び記入することで、成果の検証を試みた。

記入者によって評価結果に多少の差は認められたものの、1回目に記入した際に達成されていなかった65項目のうち、『箸を使って小さいものでもつまんで食べることができる』、『周囲の人の食事や食べ方などを意識できる』など、24項目で目標達成、9項目で改善が見られた。

しかし、『2種類以上の食品をバランス良く食べ合わせる』、『食器を正しく持って食べる』など、あまり改善の見られなかった項目もあり、指導を継続することが必要なことが分かった。

### 2 自立活動の時間における指導から

自立活動の時間における指導で実施した遊びやゲーム『ぱくリンピック』について、その結果を6月と11月とで比較した。間接的かつ部分的ではあるが、図1～4に示すように、Aの食事に関係すると思われる技能が、少しずつ高まってきている様子が、ゲームの結果からも読み取れる。

### 3 『給食指導日誌』の分析から

Aの給食の場面の様子を記録した『給食指導日誌』を分析することで、成果の検証を試みた。

6月の時点では、時間内に食べられるように何度も言葉をかけているにもかかわらず、結局間に合わなかったという記述が多かった。それに伴い片付けに間に合わない、給食当番の仕事ができないという記述も度々見られた。また、○○が挟めない、切れないという箸使いに関する記述や、食べこぼしなどに関する記述も多く見られた。

11月になってからは、みんなと同じペースで食べられる回数が多くなり、片付けに間に合わなかったという記述は、ほとんどなくなった。その結果、給食当番として片付けの仕事ができたり、昼休みに級友と遊んだりできるようになった。ときには、おかわりをする余裕も生まれた。

また、箸使いについても上達が見られ、丸かじり、食べこぼしなどに関する記述もほとんどなくなった。食事中、周りの友達から、Aの食事態度について褒められたことも何度かあった。

しかし、自分で時間を意識しながら食べたり、主食とおかずをバランス良く食べたりすることなどはまだ難しいようで、食事の途中で何度か言葉をかけることがまだ必要である。

#### 4 保護者へのアンケートの記述内容から

保護者に対して再びアンケートを実施し、その記述内容を分析することで、成果の検証を試みた。

『箸の使い方が上達した』、『袋の切り口を見付けられるようになった』、『小皿に醤油を入れる際、こぼさず適量を入れられるようになった』、『魚の名前（種類）を気にかけるようになった』などの記述から、保護者もAの成長を実感している様子が伺えた。また、残された課題についても共通理解をすることができた。

図1 市販のゲーム『お箸でどうぞ』の木片セットを、すべて別皿に移動するまでの時間を比較したもの

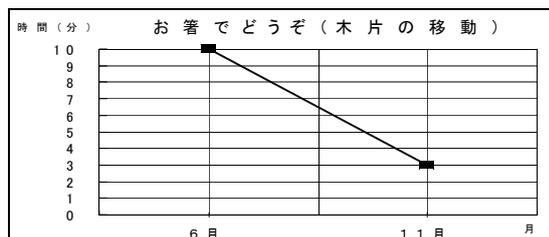


図2 紙粘土の固まりを箸を使って小さく切り、すべて別皿に移動するまでの時間を比較したもの

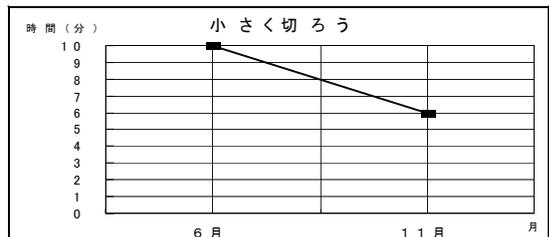


図3 紙粘土の中に隠したクリップやホチキスの針を、箸を使ってすべて取り出せるまでの時間を比較したもの

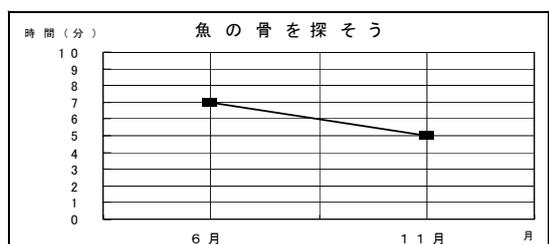
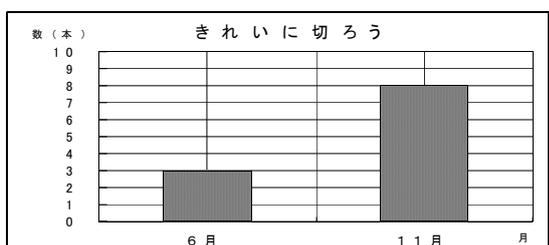


図4 名刺大のラミネート用フィルムを指でちぎり、印通りにできた回数(10回中)を比較したもの



#### Ⅷ 考察

##### 1 実態把握の仕方について

実態把握においては、食事指導に関する文献を参考に『食事に関するチェックリスト』を作成し、それを担任と協力学級担任、保護者が記入するという方法をとった。チェックリストを作成する際に、食事にかかわる様々な要素を見つめ直し、それらを項目ごとに整理したことで、教師が指導の段階をスモールステップでとらえられるようになった。また、Aに何ができて、何ができないかということをはっきりさせることができたため、指導目標をより具体的に設定することに役立った。

さらに、保護者や協力学級担任もチェックリストに記入することで、Aにかかわる三者で課題について共通理解をすることができた。

また、給食の場面の様子を『給食指導日誌』として記録したことも、Aの食事に関する課題や成長の様子を確認するために役立った。

##### 2 食事にかかわる技能を高める指導について

日常生活の指導の多くは、日常生活の自然な流れの中で行うことが一般的である。しかし、それだけでは課題が解決しきれない場合もあるため、本研究では、給食の場面における直接的な指導と自立活動の時間における間接的な指導を組み合わせることで指導してきた。

Aの特性として、一斉指導だけでは理解が深まらないこと、取りかかりが遅いことなどを考慮すると、給食の場面だけでなく、自立活動の時間を利用して指導をしたことは、Aのペースに合わせて個に応じた指導を展開するために効果的であった。

また、自立活動の時間に実施した遊びやゲーム『ぱくりンピック』にAが楽しみながら取り組めたことで、箸の使い方の技能が高まり、食べることについての課題の多くが改善された。実際の給食の場面で、そのことを想起しながら頑張れたことなども有効であったと考える。

##### 3 家庭との連携の方法について

本研究では、保護者との共通理解を図り、連携した指導を展開するために、連絡帳を通じて情報交換をしたり、家庭で活用できる教材・教具などを宿題として提供したりするよう心がけてきた。話題を提供することで、保護者の関心がさらに深

まり、いろいろな角度から食事について考え、協力し合えたように思う。また、学校だけでなく、家庭においてもAが繰り返し練習したことで、学習の成果が定着し、技能の向上につながったと思われる。

## IX 今後の課題

### 1 資料について

『食事に関するチェックリスト』や食事日誌については、個別の指導計画の補助資料として次年度に引き継ぎ、継続した指導に生かしたい。

ただし、『食事に関するチェックリスト』については今後も検討を重ね、日常生活と直結した項目を設定したり、他の子どもたちにも使えるような形式にしたりして、さらに利用しやすいものにしていくことが必要である。

また、食事だけでなく、ほかの生活場面に関しても、指導に生かせる“項目表”や“段階表”のようなものが作成できると良い。

### 2 残されたAの課題について

達成されなかった課題は、今後も継続した指導を続け、課題の解決を図っていく必要がある。

特に『2種類以上の食品をバランス良く食べ合わせる』、『食器を正しく持って食べる』などのあまり改善の見られなかった項目については、新たな視点で指導内容や方法を工夫していきたい。

しかし、Aの発達段階から考えて、指導の必要性が少ないことや、緊急性の低い課題についてはあせって指導をしないように心がけたい。

### 3 校内の支援体制について

特殊学級に在籍する児童に限らず、特別な支援を必要とする児童が、いつでもどこでも適切な支援を受けられるようにするには、しっかりした校内の支援体制を作り上げることが大切である。

協力学級担任と連携し、①児童の障害の状態や特性を共通理解すること、②効果のある指導法や支援の方法を探り、継続かつ一貫した支援ができるようにしていくこと、③指導内容をスモールステップでとらえ、教師の見取りの姿勢を作ることなどが、今後の大きな課題だと考える。そのためにも、様々な情報を校内に発信していきたい。

### 4 保護者との協力体制について

日常生活にかかわる指導は、教科の指導と異なり、だれが、どこで、どう指導するのか、見えにくいところがある。そのため、学校で指導すべきことと、家庭で指導すべきことの境界線を探してしまいがちであるが、それでは、いつまでたっても指導はうまくいかない。学校で指導できることと、家庭で指導できることとの接点を見つけることが大切であろう。そのためにも、日ごろから何でも話し合える信頼関係を築き、より良い協力態勢が築けるよう心がけていきたいものである。

しかし、保護者の中には、日常生活面での課題を指摘されると、育て方がいけなかったのかと、必要以上に悩んでしまう人もいるだろう。指導のための協力を依頼する際には、そのことにも配慮し、責任を家庭に押し付けたり、必要以上に重圧を与えたりすることのないよう気を付けたい。

また、保護者が学校に協力的なのは良いことであるが、保護者が神経質になり過ぎて、子どもが家庭でつらい思いをするのは本末転倒である。家庭は、あくまでも楽しく、幸せであることが第一である。指導していることが、子どもと保護者の幸せにつながるのかどうか、常に意識しながら指導にあたることが重要であろう。

### <参考文献>

- ・文部省 『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説－自立活動編－』 東洋館出版社 (2000)
- ・文部省 『日常生活の指導の手引き－改訂版－』 慶応義塾大学出版会 (1994)
- ・(財)鉄道弘済会弘済学園 著 『発達に遅れがある子どもの日常生活指導』<sup>1)</sup> 食事指導編 学研 (1997)
- ・上岡 一世 著 『指導年齢がわかる社会的自立のための指導プログラム』 明治図書(1990)
- ・飯沼 和三 著 『ダウン症の療育指導Q&A』 大月書店 (1997)
- ・飯沼 和三 著 『ダウン症は病気じゃない』 大月書店 (1996)
- ・山口 薫 監修 『新版ポーターズ早期教育プログラムチェックリスト』 主婦の友社(1993)
- ・小出 進、山口 薫、宮崎 直男 著 『遅れた子どもの指導基本生活百科』 教育出版 (1984)

(担当指導主事 向井 道子)